

—原著—

小中学校新学習指導要領（文部科学省）における口腔衛生教育の実践的な研究 —総合的な学習導入における，学外支援者としての授業形態の比較について—

鞍 立 常 行，岩 久 正 明

・新潟大学大学院医歯学総合研究科・
口腔生命科学専攻・口腔健康科学講座・う蝕学分野

Division of Cariology, Department of Oral Health Science, Oral Life Science Course

Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences

Tsuneyuki Kuratate, Masaaki Iwaku

Practical study on the education in oral hygiene according to the New Course of Study for Elementary and Junior High Schools by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology: Evaluation of the style of classes taught by out-of-school supporters in the introduction of integrated learning

平成14年10月25日受付 10月25日受理

Key words：新学習指導要領，総合的な学習，口腔衛生教育，T-T方式

Abstract: With the introduction of “integrated learning” started in 2002 on the basis of the New Course of Study, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, the importance of involvement of those engaged in dental care in education of oral hygiene has increased further, and new perspectives of educational concepts and techniques are wanted. In this study, to effectively conduct education in oral hygiene through systematically formulated classes, we tested various model classes of oral hygiene as out-of-school supporters in cooperation with members of the school staff including homeroom teachers and school nurses, compared different class styles, and carried out a questionnaire in school nurses about how education in oral hygiene should be conducted to envision new class styles. Goals set for each class could be achieved by conducting the class in cooperation with members of the school staff. The results of the questionnaire indicated that school nurses seek expert guidance and cooperation by dentists. From these observations, we consider that the Team-Teaching method should be regarded as the first choice and that the class style should be selected according to the size and situation of the school, principles of school and class management, and the attitude of the dentist toward teaching classes for dentists to be involved in education in oral hygiene in elementary and junior high schools and to smoothly teach classes as out-of-school supporters. It was also indicated that school nurses at elementary and junior high schools wished education in oral hygiene to be implemented and considered guidance by dental specialists to be indispensable for its effective implementation.

抄録：平成14年度から開始された文部科学省新学習指導要領における「総合的な学習」の導入によって，歯科医療従事者の口腔衛生教育への参画の重要性は益々増加し，その認識と教育技法についての新たな視点が求められている。今回，筆者は口腔衛生教育指導を系統立てた授業形態で効果的に進めることを目的とし，学外支援者として，学級担任，養護教諭などの学校関係者との連携によって各種の口腔衛生教育の授業例を試み，その授業形態を比較すると共に，養護教諭を対象にして口腔衛生教育の取り組みに対するアンケート調査を行い今後の新しい授業形態のあり方について検討した。

その結果，学校関係者との連携をしながら授業を進めることによって，それぞれの授業で定められたその目標の達

成が可能であった。また、アンケートの結果、養護教諭は、専門家である歯科医師による指導、協力を希望していた。

これらの考察並びに結論として、学外支援者として、歯科医師が小中学校の授業における口腔衛生教育を実施する為の授業形態の選択として、まず、第一選択として、Team-Teaching方式を基本とし、その学校の規模・実態、学校・学級経営の方針、そして、歯科医師の授業の取り組みを総合的に判断して、授業形態を選択することが、円滑かつ効果的に授業が進められる要件と考える。また、小中学校の養護教諭は、口腔衛生教育の実施を望み、その為にも、専門家である歯科医師による指導が不可欠との認識をもっていることが示唆された。

緒 言

校内暴力、家庭内暴力、いじめ、不登校、学級崩壊、現在、教育の現場は混迷を極め、もはやその教育の問題は、単に教育の現場だけの対応のみではなく、日本の社会全体の問題として捉え、その解決に対しては、社会全体での取り組みの必要性が唱えられている。その観点から、従来、義務教育においては、その教育のフィールドが学校一辺倒であったものが、地域、家庭そして学校の三者の連携へと、その求めるところが変化し、従来、教育の分野に接する機会の少ない人も、地域の一員という立場で、いろいろな形で教育に参加、参画する必要性が出てきた¹⁾。

また、従来の知識取得中心の教育から、真の意味での「生きる力」を求めて改定された、平成14年度から開始されている新学習指導要領²⁾の中においては、その総則の中で、「生きる力をはぐくむことを目指し、自ら学び、自らが考える力を図るとともに、基礎的・基本的内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努める。(中略)体育・健康に関する指導、生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるように配慮する」とあり、学校教育の視点からも、更なる、健康教育、衛生教育の充実に説いている。

これらの点から、口腔衛生活動の一環として、学校教育、社会教育の現場にも接する歯科医師は、教育という視点からも、自らの課題としての認識が必要となってきている^{3)~7)}。

一方、歯科診療が従来のcureからcareに変化し、そして、8020運動を中心とした生涯衛生教育、特に、学童期における健康教育の重要性が唱えられ、地域の公衆衛生活動の一環として、学校歯科医という立場で経験的に実践がなされている⁸⁾。しかしながら、学童のその中心的な支援者である学校サイドから見たとき、従来のこの指導方法は、新学習指導要領にも従来の教育方法の問題点として指摘されているような、口腔衛生の知識の取得に重点に置かれ、かつ、その併せもつおのおのの学校経営、学級経営への継続的な効果への配慮がなされていないのが現状である。

特に、今回の新学習指導要領で新設された「総合的な学習」の導入によって、今後更に、口腔衛生教育への参

加、参画が増加することが予測される中、従来の授業の技術的な検討に加え、継続的な教育効果をもねらった複眼的な、新たな教育の視点を求めた口腔衛生指導の確立が必要となってきた。

筆者は、この点に注目し、これまで、学校歯科医という立場というだけではなく、地域の一員として、小中学校において口腔衛生指導を実践してきたが^{9)~12)}、今回は、今までの経験的な実践を、系統立てた授業形態で進めることを目的として、筆者が、今まで実践的な取り組みとして、口腔衛生教育の知識を有する専門家、そして、地域の一員という立場で学外支援者として参画、参加し、学級担任、あるいは養護教諭などの学校関係者との連携しながら実践してきた口腔衛生教育のいくつかの授業事例を、その授業形態別に比較検討すると共に、養護教諭を対象として実施した口腔衛生指導の取り組みに対するアンケートの結果についても参考として、今後の新しい効果的授業形態のあり方について検討した。

実践活動の対象と方法

1・授業の企画と決定のプロセス

今回、実践を進めるにあたって、筆者が「学校側に授業の実践を本研究の為に依頼する」、また、筆者が「学校側から口腔衛生教育の授業を依頼される」、そのいずれの場合においても、学校経営の責任者であり、それを掌る校長を通じてその実施の決定をした。これは、本研究において区分した、いずれの授業形式の選択においても、その実践を円滑に進めるスタートラインとなるものである。

現行の小中学校のシステムでは、その学校の権限の全ては校長の下にあり、歯科医師側から要望する授業の実施においては、その効果が未知数であり、生徒の貴重な授業時間を使うことを考えた時、その許可を得なければ実施は不可能である。

まず、校長に実施の許可を求め、それが得られれば、その実施の可能性が生まれる。また、学内、学級内の状況を熟知している校長に相談することによって、学内支援者としての担当責任者、そして、学外支援者としての歯科医師の授業経験、時間的な都合などの環境を考慮に入れた、その授業形態の選択が容易となる。したがって、本研究においては、授業実施を決定した後、その授業を

担当する学内支援者は、校長の指示によって、養護教諭あるいは学級担任と、その学校での実情に合わせた選択となった。

2・授業形態の区分

今回の授業形態の区分は、学外支援者（筆者）が参加する時の学級担任および、あるいは養護教諭との授業のかかわり方の度合いによって次のように区分した。

1) 学外支援者単独の授業（以下単独方式と略す）

学外支援者単独による講演形態の授業方法。

2) 学外支援者と学級担任および、あるいは養護教諭とのTeam-Teaching方式（以下T-T方式と略す）

その分担、時間的な配分は多種多様であるが、単元で、学外支援者である筆者と、学内支援者である学級担任、養護教諭と共同で授業を展開した形態をここに区分した。

3) 学校全体として口腔衛生教育に取り組んだケース（以下全校方式と略す）

基本的には、T-T方式であるが、その規模が一学級単位ではなく、学校全体として口腔衛生教育に取り組んだ事例をここに区分した。

3・実施方法

1) 単独方式での授業

—その1・小千谷市立小千谷小学校—（図1）

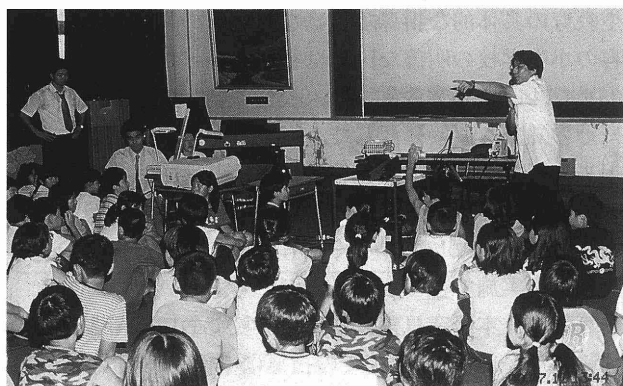


図1・小千谷小学校・単独方式「生徒一人一人の目が生きている」

900名を越す大規模校で、一学年五学級の五年生を、二グループに分け筆者一人で授業を展開した。その中での一クラスは、後述するT-T方式で3年生の時授業を実施した生徒が含まれている。

この学校は、従来のいわゆる学習参観を保護者、地域の方にその指導を仰ぐ、学習参加という形を実施し、筆者が、本研究を実施に踏み切るきっかけをつくってくれた学校であり、また、本研究のテーマにある総合的な学習（表1）を、全国に先駆けて、校内全体でその取り組みを進めている学校である^{13), 14)}。

表1・総合的な学習の概念

- 1・単一教科の枠組みを超えた総合的教科目を考えること
- 2・テーマを立てて学習活動を展開すること。
- 3・子どもたちがテーマを個別的に、または協同的に取り組み、主体的に学習活動が進めること。
- 4・学習が総合的であること。

したがって、実施にあたっては、校長に企画立案、内容の承認は随時受けているものの、その詳細については、養護教諭に全て委ねており、また、筆者も本校が診療所、住宅が校区内ということもあり、養護教諭とは度々交流をしている関係上、お互いの認識は特段の配慮をせずに、授業の企画立案（表2）、実践が出来た。

表2・小千谷小学校（単独方式）授業単元の授業計画

- 1・学内支援者（養護教諭）のねらい
自分の歯や歯ぐきの状態を認識するとともに、歯肉炎についての知識を深めることで具体的に歯肉炎を予防することに努力する。
- 2・学内支援者の学外支援者（歯科医師）への期待
歯肉炎や歯のことで、専門的立場で具体的に説明してもらうことで予防についての関心が高まり、日常生活での歯肉炎やむし歯予防の実践化につなげたい。
- 3・筆者の単元の授業内容項目
1) 生活習慣病 2) 口の中の病気の種類 3) 抜歯とその理由
4) 歯肉炎を含めた歯周疾患の病因並びに予防の基本について

授業は、歯肉炎がテーマで、トータル五単元の授業計画があり、筆者への依頼は、その中の一単元で、歯科医師という専門家を加えることで、授業計画全般の中での、生徒にインパクトを与えることによって、一連の授業への興味を引かせるという目的で計画が立てられた。したがって筆者の授業の前後に、養護教諭の授業の計画もあった。したがって、単元的にみれば、本ケースは単独方式であるが、広義的にみればT-T方式ともいえる^{15), 16), 17)}。

授業の目的は、従来、生徒が歯科領域の疾患はう蝕だけというイメージをもっている中で、歯肉炎も、子どもたちの歯科領域疾患の一つであることを認識させることとした。

内容のレベルは、子ども達には少し内容的な理解が得られるかは疑問を感じたが、あくまでも、専門家からの授業を受けた印象を与える為に、生活習慣病についての説明から始め、歯周疾患の実態と成因、そして予防、治療など多岐に渡って筆者が日頃、一般市民を対象に公民館活動などで行っている内容に近いレベルで、養護教諭の視覚によるイメージの導入を図って印象を与えてもらいたい要望もあり、スライドを使用しての授業を展開した。

—その2・小千谷市立東小千谷小学校— (図2)

430名の中規模の小学校で、その中の五年生一クラスの授業を、そのテーマは、歯科に関与することなら何でも自由ということで、校長から一単元全て委ねられた。

授業の内容は、ブラッシングの実技も交え、歯科領域における予防の重要性を説いた。



図2・東小千谷小学校・単独方式「生徒一人一人が参加」

本ケースは、この研究を進めるための実践をかなり積んでからのケースであり、その経験から授業の進め方について検討を加え、授業を進めるにあたり、授業導入部分で、子供たちには日頃見慣れないサメの顎骨を用いて生徒の気持ちを授業に向けさせ、その後は、授業を飽きさせないように、実技を織り交ぜながらの授業を展開した。

この学校も、地域の専門家へ、授業や課外活動への参加を積極的に勧めている学校であり、外部からの支援者である筆者に対して、生徒達は違和感なく授業を受けてくれた。学外支援者が授業を行う場合、その生徒の対応の良否は、授業を実施する経験の少ない学外支援者が授業するポイントでもあり、その為にも、生徒達の理解度、学級のムードなどの状況を熟知している学校サイドのリード、協力は必須である。

また、この学校では、日頃から、授業支援者と生徒と一緒に給食を会食形式で招待給食と称して実施しており、筆者も授業終了後それに参加し、食事中、咀嚼についての説明を行った。従来のう蝕、歯肉炎といったテーマに限ることなく、口腔衛生教育のひとつの方法として、咀嚼を題材としたこのような授業の展開も、今後、検討を必要とする授業方法と思われる。

2・T-T方式の授業

—その1・小千谷市立千田中学校— (図3)

200名規模の中学校の二年生二クラスを一堂に集め実施した。養護教諭が新採用2年目という経験が浅い為、校長から、その先生に専門家に内容を確認してもらいながら、衛生授業の経験させたいという要望で、養護教諭に授業の最初での導入部を10分程度で担当してもらい、

その一限の残りの時間で筆者が授業を展開するT-T方式を採用した。したがって、授業の企画立案は、校長、養護教諭、そして、筆者の三者で事前に相談して決定した。



図3・千田中学校・T-T方式「健康への意識が目覚める世代」

授業の展開は、授業の導入部分で、養護教諭から検診結果での本校の歯肉炎の罹患率についての説明によって、生徒自身の問題であることの自覚を喚起させ、その後、筆者が、重度のケースを含めた歯周疾患のケースを織り交ぜ、その成因、症状、予防法などについて授業を実施した。

小学校の授業においては、重度の歯周疾患症例のスライドは衝撃が強い為に示さないが、本ケースにおいては、中学生の予防に対する自覚を促す意味で示した。ただ、中学校での新学習指導要領における保健体育に、口腔衛生教育の具体的な指導項目はなく、その具体的な指導内容の小中学校の明確な区別は行わなかった。

また、その授業の実施は、校長の判断のもと、専門家にその知識を直接確認してもらいながら、日頃、授業を担当することのない養護教師の育成という、学校経営の一環としての希望も満たす観点もあった。学習指導要領に厳密には合致していなくても、その判断で、このような授業を実施できるという一例でもある。

筆者も、本研究以外にも小中学校での口腔衛生指導を経験しているが、中学校での指導は本例が最初であった。本例は、筆者の本研究の主旨を校長に理解してもらっての実施であり、新学習指導要領導入前の実践の為、学級活動の単元での授業であった。しかし、新学習指導要領における総合的な学習の導入によって、恐らく、中学校の口腔衛生指導が増加することが予測されると共に、小学校からの継続的な指導の展開についての検討が今後必要と思われた。

—その2・小千谷市立小千谷小学校— (図4)

学外支援者単独授業・その1で紹介した同じ学校で、3年生一学級を、虫歯の原因や予防についての知識を広め、授業での活動を通じて自分の歯は自分で守るという

自主性を育て、その意識付けをするという目標を立て、その前後に学級担当が実施した口腔衛生授業を更に深い理解を求める為に、養護教諭、栄養士、そして、保護者という立場での歯科医師としての筆者との四名によるT-T方式を採用した。

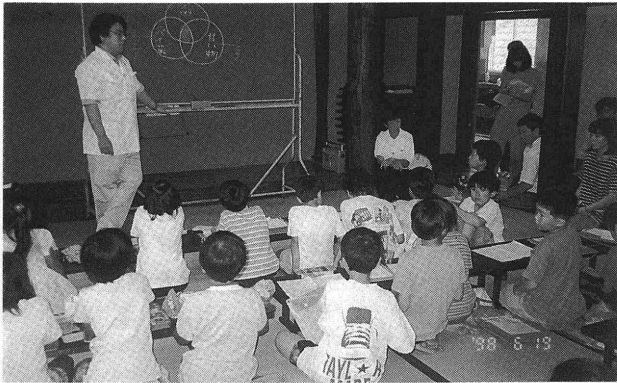


図4・小千谷小学校・T-T方式「先生の話は良く分かる」

本ケースはその計画、立案、実施全てを学級担任が主体的にリードして一連の授業を展開した。それぞれの指導の担当を表3に示す。生徒は、そのテーマの中から、事前に決めていた興味を示す内容の授業を自主的に選定して授業を受けた。授業内容を教えるだけならば、筆者一人でも十分授業を進めることは可能ではあったが、筆者は、授業展開の中では、あくまでも学級担当の授業組み立ての中でのサポート役の一人としての位置づけである。

表3・小千谷市小学校の単元における各支援者の担当項目 (T-T方式)

| 学級担任 | 養護教諭 | 栄養士 | 歯科医師 |
|------|------------|-------------------|------------------|
| 担当 | 授業全体の企画、進行 | 虫歯の予防の説明、ブラッシング指導 | 虫歯予防としての咀嚼と食品の効用 |
| | | | 虫歯の病因について |

筆者が初めて小中学生に授業を実施したケースで、事前の打ち合わせは実施したものの、その授業の内容をどの程度理解出来るかを不安がある共に、他の支援者が、説明図を利用しての授業を進めるということもあり、また、筆者の準備不足もあって、黒板を利用し、生徒の反応を確認しながら、う蝕の成因について授業を実施した。

3・全校方式

－小千谷市立小栗山小学校－（図5）

全校21名の複式三学級の小規模校で、現在は統廃合で廃校となっている学校である。この学校の養護教諭は、かねてより口腔衛生教育に積極に取り組んでおり¹⁸⁾、校長の許可の下、小規模という学校規模の特性も生かし、

土曜日の半日全ての単元を使い、前半は、各学級で口腔衛生の授業、後半は「歯の健康づくりフォーラム」と称して、全校の生徒、保護者を一堂に集め、養護教諭が作成した口腔衛生についてのクイズ（表4）を実施し、その後、筆者がそのクイズの答えの説明を加えながら、生涯における口腔衛生管理の重要性ということで、8020運動についての講演を開催した。保護者も含めた全校全体で口腔衛生指導を実施したケースである。

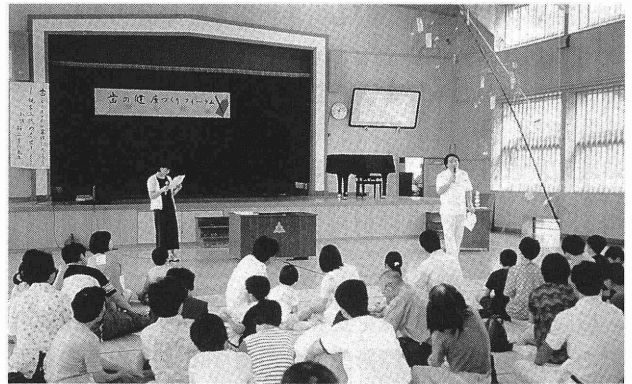


図5・小栗山小学校・全校方式「歯の健康づくりフォーラム」

表4・小栗山小学校での口腔衛生クイズ内容

| ねらい | 問題 |
|---------------------------------|---------------------------------------|
| 1 歯の健康と全身の健康は大きく影響しあうことを知ってもらう | 野生のライオンは歯が抜けたらどうなるでしょうか？ |
| 2 食後すぐに歯磨きの大切な理由を知ってもらう | むし菌の活動が盛んになるのは食後何分間ぐらいでしょうか？ |
| 3 唾液のもつ自浄作用についての働きを知ってもらう | 唾液のたくさん出る人は、むし菌になりにくいというのは本当でしょうか？ |
| 4 第一大臼歯がむし菌になりやすい理由を知ってもらう | むし菌になりやすい歯は、奥歯、前歯、どの歯も変わらない、いずれでしょうか？ |
| 5 第一大臼歯は、噛む為の中心的な働きをすることを知ってもらう | 人間の奥歯のかむ力は、どのくらいでしょうか？ |
| 6 第一大臼歯は、初めにはえる永久歯で、歯並びの基本となる | 歯並びの基準となる歯は、前歯、奥歯、いずれでしょうか？ |

前半の各学級での授業においては、一単元を各学年（複式の為三学級）でそれぞれの学級担任が口腔衛生の授業を行った。各学級での授業目標は表5に示す。そして、筆者は、各教室をそれぞれ巡回して、その専門家としてのアドバイスを低学年は仕上げ磨きについて、中学年は奥歯の磨き残ししやすい理由、並びに酸と虫歯の関係、高学年は虫歯の出来る条件について、適時指導した。

授業の計画立案は、養護教諭が中心となって、それぞれの学級担任と検討し、随時その養護教諭が窓口となって、筆者と相談しながら進めていった。

この方法では、内容は異なっている、同じ時間に全校が口腔衛生について勉強するという、学校全体の一体感が生まれること、また、指導する歯科医師側も、それぞれの学年を個別に指導するよりも時間の短縮が出来るなど利点の多い方法である。

後半のクイズの計画、立案は全て養護教諭が実施し、筆者は、その問題の成否のアドバイスをを行った。

表5・小千谷市立小栗山小学校における各学級の主題とねらい
(T-T方式)

| 学生 | 1・2年生 | 3・4年生 | 5・6年生 |
|-----|-----------------------------|--------------------------|---------------------------------------|
| 主題 | 6歳臼歯を磨こう | きれいに磨こう | おやつと虫歯 |
| ねらい | 6歳臼歯の特徴や大切さを理解し、その正しい磨き方を知る | 磨きのこしやすい部分を丁寧に磨くための方法を知る | 虫歯を作りやすいおやつの特徴を知り、虫歯にならない為のおよつを取り方を知る |

この方法は、実現すると素晴らしい結果が予測も可能であるが、これを実施するには、その校長の絶対的な支援、そして、窓口、中心になる養護教諭の献身的な活動があって初めて実施できる方法であり、学校の規模、学校のスタッフの関係など、歯科医師の意欲はもとより、そのいくつかの条件を満たして初めて実現できる方法である。しかし、全国の学校でこの様な試みが行われれば、口腔衛生教育は更に推進するものと思われる。

4・養護教諭に対するアンケートの実施

口腔衛生教育の実践を重ねる中で、その一方の指導者である養護教諭の口腔衛生教育に対する取り組みの認識を確認する為に、表6の質問事項の小千谷市内の小中学校の養護教諭にアンケート調査を行った。

表6・口腔衛生教育の取り組みに対する養護教諭アンケート項目

- 1: 現在学校で口腔衛生教育(授業)を実施していますか、あるいは、過去に経験がありますか?
- 2: 現在学校での指導計画の中に、口腔衛生教育(授業)の予定はありますか(養護教諭の関与に関わらず)?
- 3: 先生は口腔衛生教育に興味がありますか?
- 4: 興味あると答えた先生にお聞きします。
口腔衛生教育・授業(単独、あるいはT-T方式いずれかでも)の実施について?
- 5: 興味がない、どちらともいえないと答えた先生にお聞きします。
その理由は?
- 6: 全ての先生方にお聞きします。
もし、その専門家である歯科医師から協力を得られればどうですか?
- 7: 上記の設問で、協力がほしいと、答えた先生にお聞きします。
授業の計画、立案、実施はどのような形を希望しますか?
- 8: 口腔衛生教育を実施するにあたって希望があれば、何でもかまいませんのでご意見お願いいたします。
- 9: 既に私の授業をお聞きになったり、一緒にされた経験のある先生のご感想、ご希望お願いいたします。

結果

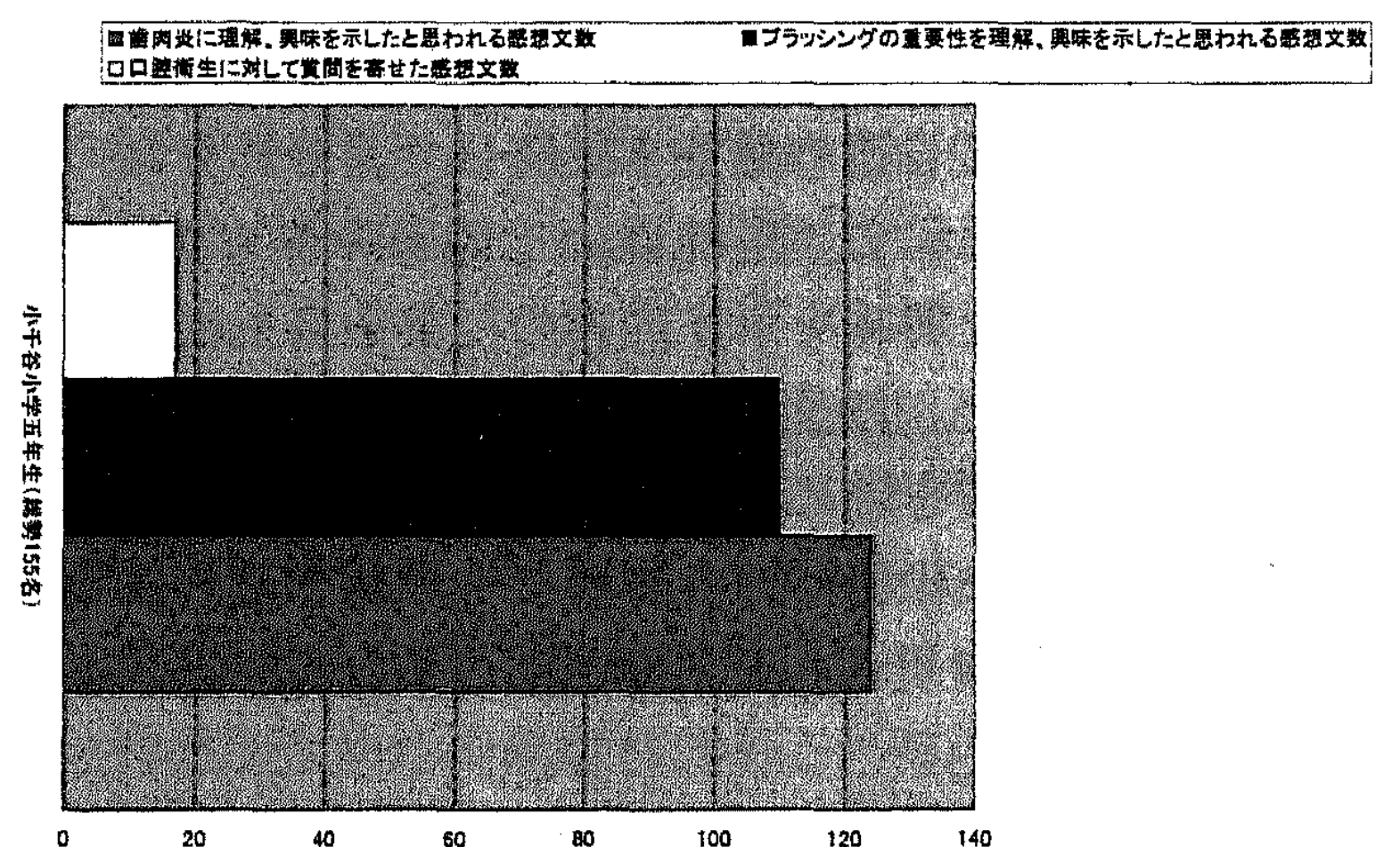
1・単独方式

その1・小千谷市立小千谷小学校

養護教諭から、「専門家を授業計画の中の途中に入れることによって、計画したそれぞれの単元での授業全体の流れもできた。」「生徒たちが、その後の養護教諭の実施した授業で、それぞれの生徒が、鏡を使って歯肉の汚れを確認したときに、筆者の授業を受けたことにより、歯肉炎に興味をもち始め、積極的にその授業に取り組んだ生徒が増えた」などの報告を受けた。

授業の目的であった、歯肉炎の存在のイメージが生徒にどの程度与えることが出来たかを確認する為に、筆者に宛てた、生徒からもらった授業を受けた感想文の内容を評価した。(表7)

表7 小千谷小学校(平成12年度)



感想文の文中の中で、歯肉炎について感想を記載した感想文が、その総数の80%、また、歯磨きの重要性を確認したとの感想があったものが71%、また表8に示す質問を寄せたものが11%あり、歯肉炎の存在のイメージを与えるというその授業をそのねらいは、概ね達成できたと考える。

表8・小千谷小学校(単独方式)感想文での主なアンケート質問事項

- ・歯がないと、どうしてしゃべりづらいのですか?
- ・もう一度聞くかもしれませんが、歯垢はどうして溜まるのですか?
- ・何故、とがっている歯と平らな歯があるんですか?
- ・私は歯並びが悪いので、悪い人の歯磨き粉の種類は違うのですか?
- ・歯を削らない治療があるという話でしたが、どんな治療をするのでしょうか?
- ・歯槽膿漏の名前の由来を教えてください
- ・歯は骨なんですか?
- ・私の歯も歯肉炎でしょうか?

その2・小千谷市立東小千谷小学校

図2に示すように、授業終了後、学級担任からの報告からも、子どもたちが筆者の授業に興味を示しながら授業を受けていることが分かった。

授業が終了後、生徒たちからもらった感想文を検討し(表9)その中で、「歯の重要性、う蝕の予防のポイントが分かった」、などの授業の内容を理解したと思われる記述があった生徒が92%、「授業で指導したブラッシングを実行した」など、何か実行に移したことを記述した生徒が54%あり、また、授業を受け、表10に示す、そこから生徒自身が疑問を感じた質問を寄せた生徒が15%あった。

表9 東小千谷小学校五年生(平成12年度)

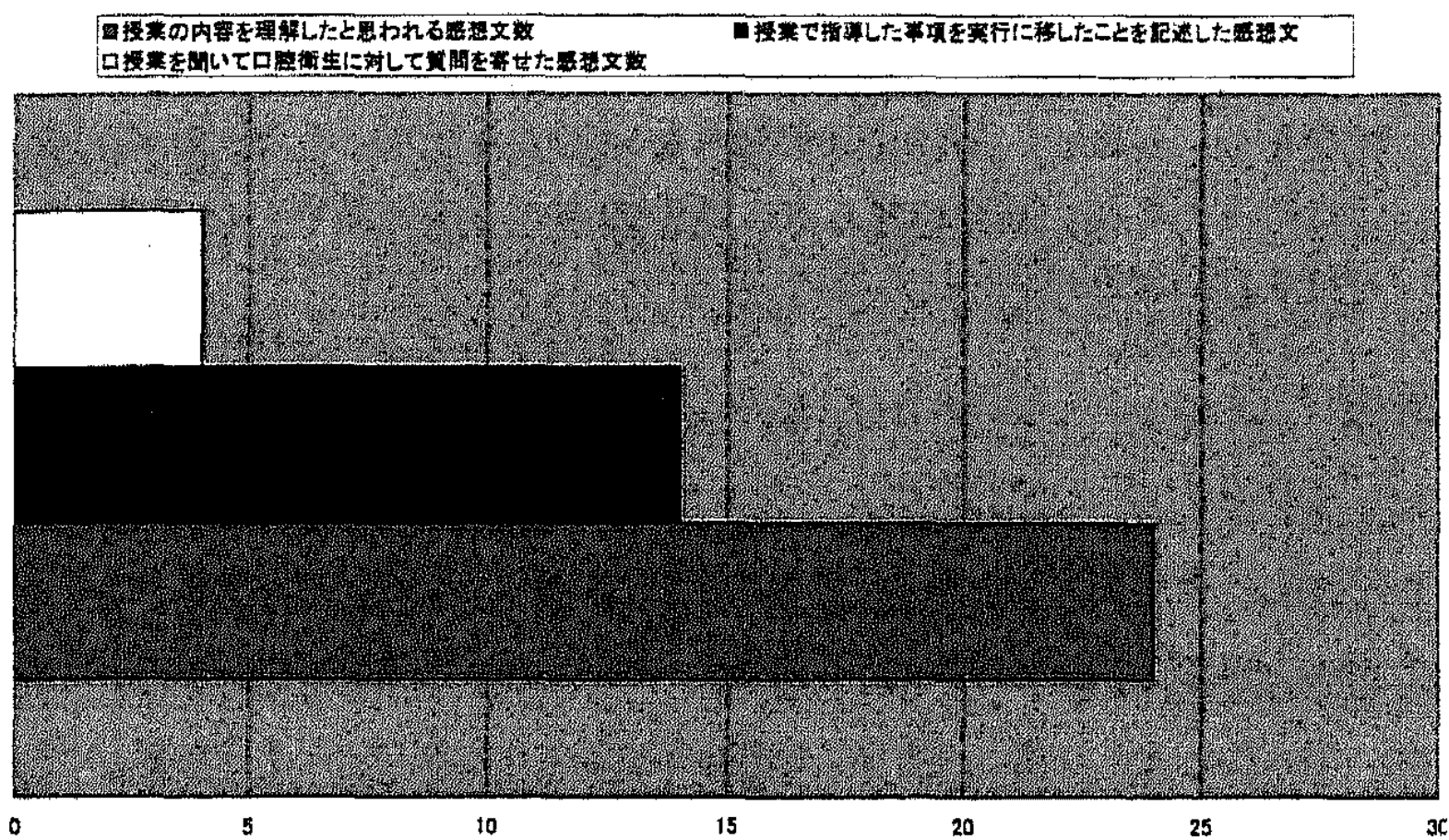


表10・東小千谷小学校感想文での主な質問項目

- ・歯ブラシは、小さめが良いというお話でしたが、僕は、体が大きいのですが、それでも小さな歯ブラシを使ったほうが良いのですか？
- ・私は、いつも歯磨き粉を歯ブラシの半分つけます。歯磨き粉はどれくらいつければ良いのですか？
- ・サメの歯は生え変わるという話ででしたが、他の魚の歯はどうなのですか？
- ・あごの骨が折れた人は一ヶ月も口が開けられないと、食べ物は食べられないのかな？

2・T-T方式

その1・小千谷市立千田中学校

授業後に一緒に筆者の授業を参観していた校長から「普段の授業では、集中して授業を受けられないその生徒達が、あんなに真剣に授業を受けていたのを初めて見た」との感想を頂いた。

また、授業中に任意で書いて提出してもらったアンケートには、表11に示すような、自分自身を振り返って、歯肉炎を考えた質問が寄せられた。その確認出来た人数は数例ではあったが、中学生という意識変化をさせるのに難しい年代に、それを実行させた結果となった。

表11・千田中学校アンケート結果

- ・歯を磨くと血が出るんですけど、僕も歯肉炎でしょうか？
- ・私は、検診の結果、歯肉炎と言われましたが、授業をきいたように予防に努めれば大丈夫でしょうか？

その2・小千谷市立小千谷小学校

授業終了後、学級担任から、「これからは、僕、毎日歯磨きするよ」「お菓子食べたら、直ぐに歯を磨かなければいけないだね」「お口ブクブク(フッ素洗口)は大切なだね」そんな生徒の授業の内容や、「全部の先生の話聞いたかった」「お話が面白かった」など、授業に対する感想があったとの報告があった。

その後、本学校は、新潟県学校保健会主催「平成13年度・新潟県よい歯の学校運動」において、優秀校(大規模校の部)に表彰された。

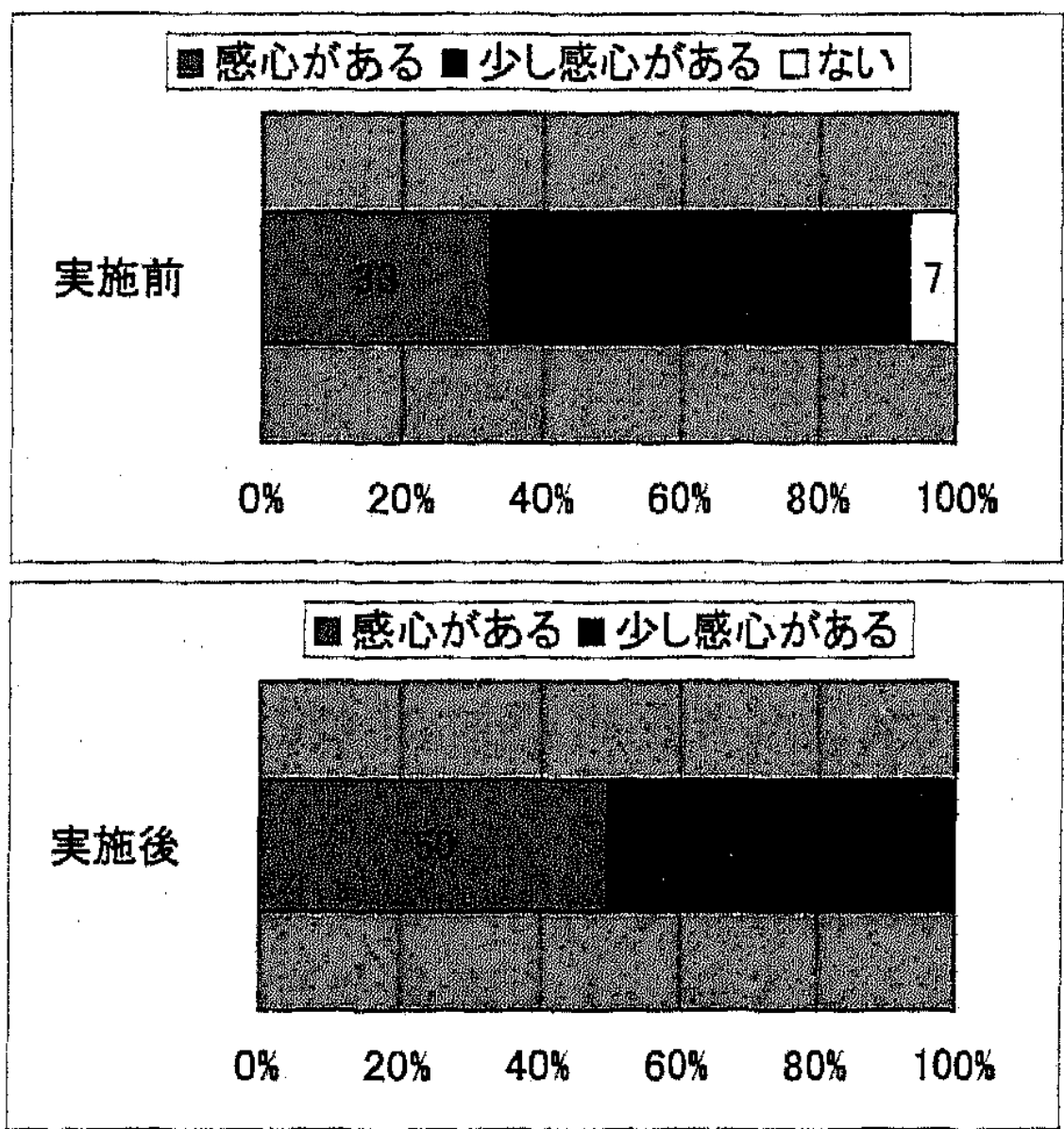
3・全校方式

小千谷市立小栗山小学校

本校の養護教諭である横井の「歯の健康づくりへの関心度の変化」の調査(表12)によると、家庭における関心度は、授業を受ける前33%であったものが、50%へ上昇し、その関心度が上昇したことを示した¹⁸⁾。

また、養護教諭から、授業を受けてから、「鏡を真剣に見ながら磨いている」「声をかけなくても、子どもが磨くようになった」などの保護者から、一連の授業を受けて、生徒の行動の変化に対しての感想が多く寄せられているとの報告があった。

表12 小栗山小学校アンケート結果



そして、この学校も、この年授業を実施した年に初めて、新潟県学校保健会主催「平成13年度・新潟県よい歯の学校運動」において、優秀校(小規模校の部)に表彰された。

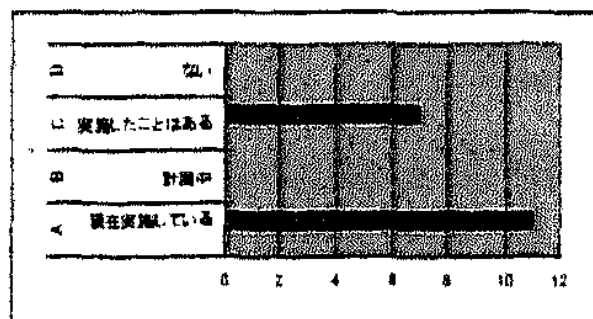
4・養護教諭に対するアンケート結果 (表13)

表13 口腔衛生教育の取り組みに対する養護教諭アンケート

回答者 18名/20名中(回答率 90%)

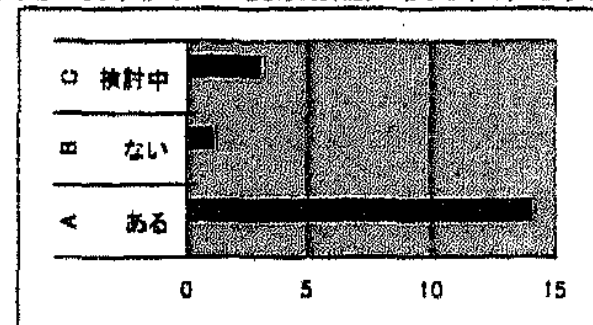
設問1: 現在学校で口腔衛生教育(授業)を実施していますか、あるいは過去に経験がありますか?

| | | |
|---|-----------|----------|
| A | 現在実施している | 11名(61%) |
| B | 計画中 | |
| C | 実施したことはある | 7名(39%) |
| D | ない | |



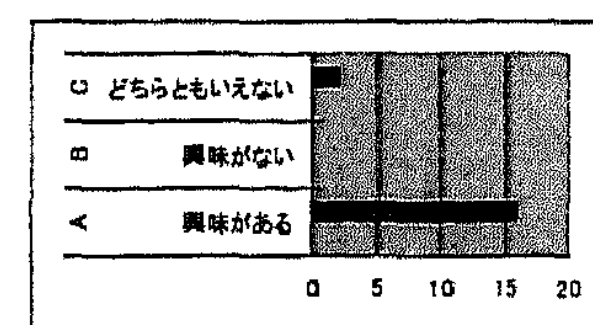
設問2: 現在学校での指導計画の中に、口腔衛生教育(授業)の予定はありますか(養護教諭の関与関わらず)?

| | | |
|---|-----|----------|
| A | ある | 14名(78%) |
| B | ない | 1名(6%) |
| C | 検討中 | 3名(16%) |



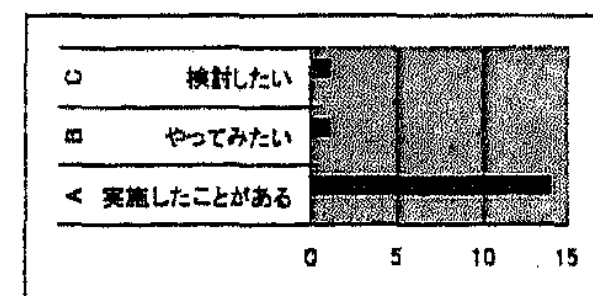
設問3: 先生は口腔衛生教育に興味がありますか?

| | | |
|---|-----------|----------|
| A | 興味がある | 16名(89%) |
| B | 興味がない | |
| C | どちらともいえない | 2名(11%) |



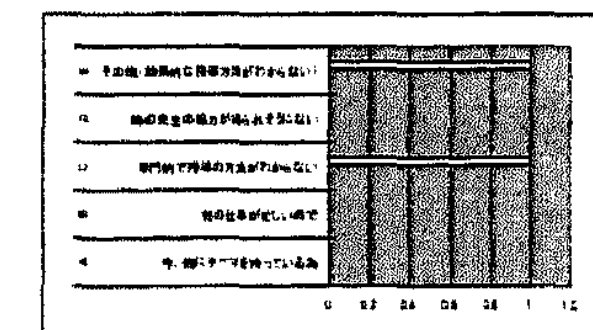
設問4: 興味あると答えた先生にお聞きします。口腔衛生教育・授業(単独あるいはT-T方式いずれかでも)の実施

| | | |
|---|-----------|----------|
| A | 実施したことがある | 14名(78%) |
| B | やってみたい | 1名(6%) |
| C | 検討したい | 1名(6%) |



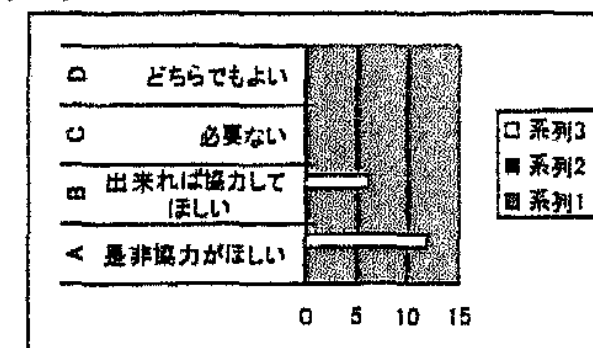
設問5: 興味がない、どちらでもないと答えた先生にお聞きします。その理由は?

| | | |
|---|---------------------|--------|
| A | 今、他にテーマを持っている為 | |
| B | 他の仕事が忙しいので | |
| C | 専門的で指導の方法がわからない | 1名(6%) |
| D | 他の先生の協力が得られそうにない | |
| E | その他(効果的な指導方法がわからない) | 1名(6%) |



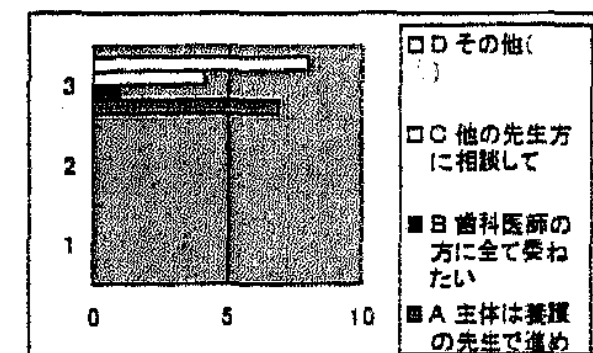
設問6: 全ての先生にお聞きします。もし、その専門家である歯科医師から協力を得られればどうですか?

| | | |
|---|-------------|----------|
| A | 是非協力がほしい | 12名(75%) |
| B | 出来れば協力してほしい | 6名(25%) |
| C | 必要ない | |
| D | どちらでもよい | |



設問7: 上記の設問で、協力がほしいと、答えた先生にお聞きします。授業の計画・立案・実施はどのような形を希望しますか?

| | | |
|---|---------------|---------|
| A | 主体は養護の先生で進めたい | 7名(39%) |
| B | 歯科医師の方に全て委ねたい | 1名(6%) |
| C | 他の先生方に相談して | 4名(22%) |
| D | その他() | 8名(44%) |



全員が口腔衛生教育を実施した経験があり、その多くが、学内でも現在予定されていた。

また、養護教諭の多くが、口腔衛生教育に興味をもち、興味を示さないその理由がその専門的指導方法が分からないことを理由としていた。

また、その全てが、専門家である歯科医師の協力を求めており、その実施方法には、それぞれ考え方があった。

口腔衛生教育に関する意見を聞いたところを表14に、また、筆者の授業を実施した学校の養護教諭に、その授業の感想を表15に示す。

表14・口腔衛生教育を実施するにあたって希望(養護教諭に対してのアンケート結果)

- ・専門的な知識を有する方からの支援は、口腔衛生教育にはかせない。積極的な協力をお願いいたします。
- ・学校でも取り組んでいるがマンネリ化する。歯科医師が参加することで子供達の意識、関心度が高まってくる。養教にとっても勉強になる。歯科医師と連携がとれるとよい。
- ・専門家が実施すると生徒たちが興味を持って真剣に授業を行う。協力していただければ是非お願いします。

表15・筆者の授業を聞いたり、一緒にされた経験のある先生の感想、希望(養護教諭に対してのアンケート結果)

- ・専門的な知識を持っているからポイントをしばって指導してくれる。
- ・担任、養教、歯科医師のT-Tだと個別の支援の時に目が行き届き、丁寧に来る。
- ・スライド等実例を挙げてくれると子供にインパクトがある。
- ・身近な話題を取り入れてあって学ぶことが出来た。
- ・授業をきっかけに、毎朝10分歯磨きをするようになったり、治療を受けた生徒が実際に見られ、専門の方からの知識をいただけることはすごいことだ。

考察

1・単独方式の問題点

従来、歯科医師が主に実施してきた学外支援者単独方式での授業においては、通常、テーマも指定されないまま、あるいは、あっても虫歯予防というような漠然とした大きなテーマを与えられての実践が大半であった。これは、その企画の部分では、比較的簡単ではあるが、生徒の能力、学級内のムードなどの状況を把握せず、また、その授業の明確な学校側の目標設定を決定しないままに実施する場合が多い為、その成果は比較的薄く、長期的、計画的な企画も困難であった。

本研究での、この方式で実践した授業では、いずれも良好な結果は得られたが、それぞれの学校が、日頃、学外支援者の授業を日常的に導入して実践している学校であること、そして、このケースを実践した時期は、筆者が授業の経験を積んで、学校の要望する目的を把握でき、それを授業展開できる実践を積んでいたことなどが、そのベースにあったと考えられる。したがって、この方法では、一つのイベント的な意味合いで実施する場合を除いて、明確な授業のその目的を学校側から求められ、それを実施する場合、授業の経験の少ない歯科医師にとっては、多くの経験と労力を必要とし、この点は、逆に、歯科医師がその授業に参加をためらう要因にも成りえると思われる。

また、今回の単独での筆者の授業の実施においても、結果的に、その筆者の実施前の準備は、T-T方式の数倍を要したことを加味すると、この方式では、各学校での学外支援者を迎える体制の優劣、そして、歯科医師の授業の豊富な経験が必要となり、歯科医師のその大半は、学校側が求めるその目的を達成することは簡単ではない

ことが推測される。

2・T-T方式の利点

学内支援者である養護教諭、学級担任などと共同で進めるT-T方式においては、事前に、学校側で立案した計画を、若干の打ち合わせを実施することによって、その授業の目的が明確にされると共に、その役割を限局的に学校側から指摘されれば、歯科医師として、今までの養ってきた口腔衛生の専門家としての知識で授業を展開するだけで済み、その要望を実現することも可能であった。

アンケート調査においても、学内支援者である養護教諭が、口腔衛生教育の実施をする中で、専門家としての歯科医師の協力を求めており、その結果からも、養護教諭、学級担任などと共同で進めるT-T方式の選択は、有用な選択であると思われる。

これらを、本研究を総合的に考察すると、T-T方式を授業の組み立ての基本として考え、学外支援者としての歯科医師の実情、学校側の環境を考慮しながら、その組み合わせを考えると、多様な方式が考えられる。また、歯科医師が、この方式を出発点として、口腔衛生教育の実践を積み重ねることによって、歯科医師単独でも、その学校側の求めを満たすことも可能になってくる。そして、本研究で実践した、口腔衛生教育が題材となって、地域をも取り込み、学校全体での生涯学習へと発展することも示唆された。

3・これからの口腔衛生教育のあり方について

安井¹⁹⁾は、これからの学校歯科保健教育が、従来は教育の実践活動としての歯磨きの指導であったり、また、その目標が、活動の結果として虫歯の罹患率の低下をもたらせたりするところにあったが、これから大切なことは、歯科保健活動を通じて、生徒に「健康と何か」「どのようにすれば健康の保持増進が出来るか」を自ら考え、実践できる能力を開発支援することであると説いている。これは、新学習指導要領が示す「生きる力」そこに通じる考え方であり、また、単に、口腔衛生教育の目標に留まらず、これからの日本の教育全般が目指す、日本の教育目標の新しい概念である。

歯科医師の責務の一つである、公衆衛生発展に寄与する為には、従来進めてきた、う蝕の罹患率の低下などを目的とした視点での口腔衛生教育への取り組みも重要ではあるが、新しい教育の概念をも含めた複眼的な視点を求めて、本研究で示された、そのシステムの再考などの検討を積み重ねることによって、口腔衛生教育の結果が、日本の教育全体へも寄与するものと思われる。

4・今後の研究課題

今回、口腔衛生教育の実践を重ねていく中で、歯科領域分野での教科書を含めた教材の不備¹¹⁾、また、具体的な授業の進め方に対する検討が乏しいことを実感した。特に、本研究の反省点にもなるが、テストという形式ではない、その教育効果を確認する方法の確立が全く成されていないことが分かった。その為に、新しい口腔衛生教育の目標も、従来求めていたう蝕の罹患率の結果などによってだけで、その教育の成否を判断されることが懸念される。したがって、今後、口腔衛生教育の具体的なテーマも、虫歯予防、歯肉炎などに加え、本研究でも実施した咀嚼などの幅広いテーマを求めることの検討も含め、その教育効果を確認できる方法について、実践を重ねていく中で研究していきたいと思う。

結 論

- 1・学外支援者として、歯科医師が小中学校の授業における口腔衛生教育を実施する為の授業形態の選択は、第一選択してT-T方式を基本とし、その学校の規模、学校経営の方針、並びに、学外支援者としての歯科医師の授業の経験、時間的な制約等を総合的に判断してその授業形態を選択することが、円滑かつ効率的に授業が進められる要件と考えられる。
- 2・小中学校の養護教諭は、口腔衛生教育実施の重要性を十分に認識しており、その為に、専門家である歯科医師による継続的指導が不可欠である。また、両者の協力による企画、立案、実践により得られる効果は大きいことが示唆された。
- 3・従来のような口腔衛生の知識を生徒に、講義、教育するという一元的な観点だけではなく、視聴覚教育、模型実習、相互実習等を加え、それらを学校教育全体の流れの一環に恒常的に取り入れ、多角的、複眼的な視点を考慮したカリキュラムの設定が、生涯教育全体に寄与するものであり、これは、総合的な学習の導入の目的にも合致するものと思われた。
- 4・う蝕、歯周疾患などの口腔衛生教育の内容に加え、咀嚼等を題材とした授業の展開も、今後検討を必要とする授業方法と思われる。

稿を終えるにあたり、本研究を実施するにあたってご協力を頂いた小千谷市教育委員会、並びに、小千谷市内の各小中学校関係者に深く感謝をいたします。

参考文献

- 1) 佐藤 学：教育改革をデザインする．3-47頁，岩波書店，東京，1999．
- 2) 文部省：小中学校学習指導要領，1999．
- 3) 和唐正勝：新学習指導要領と保健の授業．学校保健のひろば，16：12-15，2000．
- 4) 稲垣忠彦：総合学習を創る．70-75頁，岩波書店，東京，2000．
- 5) 日本学校保健会：歯，口の健康づくり・総合的な学習の時間で何が出来の．1-22，2001．
- 6) 三木とみ子：健康教育から総合的な学習を構想する．学校保健のひろば，24：36-40，2002．
- 7) 小暮義弘：総合的な学習の時間，「学校歯科保健の基礎と応用」安井利一，西連寺愛憲（編）．72-76頁，医歯薬出版，東京，2001．
- 8) 川口陽子，豊島義博：学校歯科保健，治療から予防への転換．日本歯科評論，658：5-7，1997．
- 9) 鞍立常行：新たな視点での学校保健指導の試み．デンタルダイヤモンド，24（5）：169-172，1999．
- 10) 鞍立常行：行政，地域住民の立場から保健教育活動を考えて．学校保健のひろば，21：32-35，2001．
- 11) 鞍立常行：歯科の新しい教科書問題．デンタルダイヤモンド，27（1）：142-147，2002．
- 12) 鞍立常行：教育のフォールドを地域・家庭・学校へ．学校保健のひろば，24：42-45，2002．
- 13) 佐藤学，新潟県小千谷小学校：親と教師で創る授業への挑戦．100-143頁，明治図書，東京，1997．
- 14) 平澤憲一：地域から頼りにされる学校づくり．学校運営研究，501：70-71，1999．
- 15) 戸田芳雄：学校における歯，口の健康づくりの進め方．日本学校歯科医会会誌，84：60-62，2000．
- 16) 岡崎好秀：楽しさ100倍保健指導，クインテッセンス出版，248-254頁，東京，2000．
- 17) ライオン歯科衛生研究所（編）：子どものための歯肉炎予防マニュアル．61-106頁，第二版，東山書房，京都，1996．
- 18) 横井初美：自らの健康問題をして主体的に取り組むことのできる児童の育成．平成12年度・小千谷の教育（研究編）：48-49頁，新潟，2002．
- 19) 安井利一：児童生徒の歯・口の健康の現状と課題．日本学校歯科医会会誌，84：63-64，2000．